

生産と労働*

小幡道昭†

1995年7月24日

目次

1	生産過程	3
1.1	労働過程の「単純な諸契機」	3
1.2	生産と消費	5
1.3	生産の概念	7
2	労働過程	9
2.1	自然の統御	9
2.2	合目的な活動	11
2.3	生産的労働の析出	13
3	環境・生産・労働	14
3.1	労働過程の「対象的条件」	14
3.2	消費と労働	16
3.3	環境破壊と負の労働量	19

*Production and Labour

†東京大学 経済学部

はじめに

本稿の主題は、人間労働の特性を理論的な観点から再検討してゆくことにある。今日、生産技術の発達とともに、人間が労働から解放され、経済活動において労働のもつ意義が次第に低下しているようにいわれることが多い。たしかに、人間労働のあり方が急激な変化にさらされていることは否定できない。事実、製造過程における機械化・省力化の急激な進展のもとで、商業・金融などの市場活動やそれに随伴する運輸・通信といったサービスにますます多くの人間活動が吸収される傾向にある。と同時に、これまで市場とは異なる原理に依存してきた人間の心身に直接関連する、教育・医療や育児・介護などのさまざまな活動も他者の活動を通じて社会的に維持されるようになってきている。そしてこのような活動の場の推移とともに、その内容も大きな変化を遂げつつある。それに対して、従来の労働概念をそのまま当てはめようとすれば、そこからはずれた側面ばかりが目につくのは当然のことであろう。こうして、産業社会の発展は基本的に脱労働化に向かっているのだといった印象も生じることになる。しかし、それは従来の労働概念がある側面に偏っていることがもたしているだけなのかもしれない。実際、現実には人間がこのような動向のなかでますます多くの時間を余暇に割いているのかということ必ずしもそうではない。それが賃金労働という形態をとるかどうかは別として、むしろこれまでの時代に比べてますます多くの時間を他人のために はたらく ことに費やしている観さえある。このようにみると、旧来の労働概念を固定してそれと異なる活動が増大したという方向で考えを進めるよりは、むしろ労働概念のほうを再開発するほうが、変容しつつある人間活動を包括的に理解する捷径であるように思われる。

だがこのような問題意識から、労働概念を拡張し再規定してゆくことには固有の困難がともなう。というのは、経済理論の基本的な構成方法が、これまで市場という観点を中心に人間社会を把握する方向に特化してきたからである。むろん、このような方法だけが、人間社会を理解するうえで絶対的なものでないということは、経済理論を研究するものにとってもある意味では自明なものだったといっていよい。しかし、それを相対化する対向軸として、たとえば労働という視座を設定しようとした場合、¹ 交換という視座によるようには理論化がうまく進まない。このため、労働はせいぜい市場からみて特殊な、外的要因として論じられるにとどまってきた。だが、人間の行動原理としてみたときに、市場で利得を追求する交換行為に比べて、労働と称される活動がそれ自身独自の理論的分析を加えることのできない、まったく無規定的なものであるかということ、そうとはいいきれない。交換が人間社会を捉えるための有力な視座であるとすれば、それと同等の視界を与えるかどうかはともかく、労働もまた人間社会を捉える有力な視座を用意する可能性を秘めているのである。

経済学の歴史を振りかえってみても、人間労働が富裕に至る手段として重視されていった過程は、同時にまたその市場的な観点から労働が形式的に捉えなおされてゆく過程でもあった。土地のみを富の唯一の源泉であるとしたフィジオクラートを批判し、価値の源泉を労働一般に拡張し一元化したアダム・スミス

¹ 小幡 [?] は、このような観点からロックの広角的な労働概念を再検討したものである。

は、またその労働を自然に対する「本源的な購買貨幣」であるというかたちで交換に還元した。² それは経済学的な一元的社会認識の確立を意味するものであった。こうした接近方法はその後の古典派経済学の発展のなかで一般化され、必要な労働を投下すればほとんど無制限に増加することのできる商品に分析対象を絞り込み、商品価値の尺度としての労働量に関心を集中させることになったのである。³ しかし、マルクスの労働過程における考察は、古典派経済学者のように労働を単に「煩勞」⁴ として捉え、他の生産手段と同様に生産に投下されたモノとして扱うことに終始するものではなかった。そこには労働過程を独自に取り出し、その内部の構造を労働主体の観点から掘り起こしてゆく独自の視座が蔵されているのである。その意味で、『資本論』はその本質において「経済学批判」であったといえよう。このような認識にたち、ここではマルクスによる労働過程の規定に批判的検討を加え、それを手がかりに人間労働の特質を独自に掘りさげてゆくことにする。

以下、本稿はおよそつぎのような順序で考察を進めてゆく。まず、[1] 労働と生産との関連について検討を試みる。マルクスの労働概念は、基本的には生産と密着したかたちで規定されているが、この点に反省を加え、労働と生産との間に横たわる溝を明確にしてゆきたい。『資本論』の論理構成では、労働から生産へ進む配列になっているのに対して、本稿は標題が示すとおり、逆に、生産と消費というモノの過程を基礎におき、それを制御するものとして人間労働の分析に進むという方法を提起する。ついで、[2] これをふまえて人間に特有の生命活動としての「労働そのもの」と、これに対し生産・消費の過程に拘束された「生産的労働」との関連を考察してゆく。『資本論』の労働過程では、両者はいわば表裏の関係におかれているが、本稿では「生産的労働」は「労働そのもの」のうちに凝結する部分であるとする立場が対置される。このような「生産的労働」は、生産技術の発展のもとで分解され、やがて機械装置などに置換され物象の世界に押し出されるのであるが、それは同時にまた、新たな「生産的労働」の生成のフロンティアを準備するかたちで進むという考え方が、これによって示されるはずである。最後に、[3] このような労働概念の拡張がもつ効果を確かめるために、消費活動の社会化や自然環境の破壊といった問題に論及してやることにする。ここでは、人間が労働によって制御する再生産過程は、複雑で認識不可能な自然的な物質代謝のなかに浮遊する系にすぎないという視座を提示し、そこから、一方的にこの浮遊する系の規模を拡大するだけでなく、その内部に立ち入って欲求の充足活動としての労働のあり方を再構築することの必要性を問題にしてみたい。

1 生産過程

1.1 労働過程の「単純な諸契機」

古典派経済学の批判的研究を出発点としたマルクスの場合、単に社会的な純生産物が階級間にどのように分配されるかをはかる尺度していわゆる労働価値説が採用されただけではない。マルクスは、労働量を

² Smith[5],I, p.48,(1)53 頁

³ Recardo[?], p.12, (上) 19 頁

⁴ Smith[5],I, p.47,(1)52 頁

所与のものとして経済理論を組み立てたのではなく、むしろそれが量化される過程にまで踏み込み、そこに隠された社会関係を積極的に分析しようとしたのである。この点こそ、マルクスの理論に狭義の経済理論の枠組みをこえた社会理論としての広がりを与えるものであったといえよう。

このような観点は、『資本論』の第5章第1節「労働過程」において、端的なかたちで示されている。ここでは、

使用価値または財貨の生産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行われることによつては、その一般的な性質を変えるものではない。それゆえ、労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかかわりなく、考察されなければならないのである。⁵

として、労働過程を「特定の社会的形態」から独立に考察する視座を提示するのである。ここには人間労働のもつ「一般的な性質」の分析を基礎として、そこから市場を通じて社会的再生産を編成するという、資本主義経済が他の諸社会に対して有する歴史的な特殊性を理論的に解明するという、マルクス固有の接近方法が示唆されているといえよう。だが、ここでのマルクスの説明では、労働過程の「一般的な性質」が「特定の社会的形態」と関わりなく考察可能となる根拠が、「使用価値または財貨の生産」という点に求められている。それは、かならずしもあらゆる人間社会の存続の基礎をなすという一般性に求められているわけではなく、その結果、労働過程の基本規定も労働主体と労働主体との社会的な関係を捨象されて、もっぱら労働主体とモノとの間の直接的な関係に限定され、社会的再生産との関連の考察も希薄なものに終わっている。⁶

このような限界をかかえながら、『資本論』ではともかく労働過程の内部に踏み込んだ考察が展開されゆく。すなわち、まず労働主体の観点から労働過程の単純な諸契機が「合目的な活動または労働そのもの」と「労働対象」ならびに「労働手段」として摘記され、それぞれの契機に一つのパラグラフを割り当て説明が加えられてゆく。この箇所は一読すると、人間労働を念頭におきながら、ただその構成要素を記述しただけであるように見える。しかし、やや詳しくみてゆくと、まず「労働そのもの」を説明していると思われる部分が展開され、ついで

労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動または労働そのものとその対象とその手段である。

7

という一般的総括規定が挿入される。そして、この後に「労働対象」ならびに「労働手段」についての説明を配置する構成になっている。マルクスの場合も、「労働過程の単純な諸契機」はけっして同じ平面上に

⁵ Marx[10],I, S.192,(1)311-12 頁

⁶ このことの延長として『資本論』では、協業、分業、機械制大工業といった特定の社会形態から離れて分析されるべき諸問題を含む労働組織の社会的展開が、もっぱら資本による剰余価値増進の手段というからの分析に封じ込められるという限界が派生している。その結果、マルクスの場合、生産力上昇の基本的な契機が、機械制大工業における自動機械の導入による人間労働の置換という側面だけが強調されることになる。しかし、生産力の発展の過程を理論的に考察しようとする場合、労働の排除だけではなくその排除された労働がつぎにどのようなかたちで吸収され新たな分解にさらされるのかという点に注目する必要がある。たとえば手先の労働が解体され自動化されても、人間の知的な活動という領域に分解のフロンティアが形成されている点に着目する必要がある。このような労働の社会性の理論的考察は別稿で展開するが、とりあえずこの問題を近年の情報通信技術の発展との関連で考察した小幡 [13] を見られたい。

⁷ Marx[10],I, S.193,(1)313 頁

ただ列挙されているのではなく、三者は独自に構造化されている。すなわち、「労働手段」が「労働対象」に作用して生産物に転化する、いわばモノとモノとの反応過程が基底に据えられ、この過程に対して意識的にはたらきかける「労働そのもの」との間には一線が画されているのである。⁸ そしてこの（労働そのもの（労働対象、労働手段））という関係が

この全過程をその結果である生産物の立場からみれば、二つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる。⁹

というかたちで、「生産物の立場」から捉え返される構成になっている。ここでは労働のおこなわれてゆく方向に沿ってみると労働過程として現れる同じ過程が、結果からふりかえると生産として現れるというように読めるのである。

このようなマルクスの規定では、「生産物の立場」からみると、そこにはかならず「生産的労働」が介在していることになる。たしかに『資本論』の場合も、「剰余価値の自然的基礎」に関連して生活手段としての、あるいは労働手段としての「自然の富」についてふれてたり、¹⁰ あるいはまた、「労働期間をこえる生産期間」という範疇を提示し、木材の乾燥や葡萄酒の発酵などのような労働の関与しない生産過程の存在を認めているところがないではない。¹¹ しかし、それらはいずれもすでになされた労働との関連において論及されているにすぎず、あくまでも基本は「生産的労働が生産手段を新たな生産物の形成要素に変える」¹² という点にあるといつてよい。だが見方によっては、果樹が食用果実をもたらすように、もともと自然過程のうちにはいわば人間にとって好都合な完全オートメーションが内蔵されており、人間による物的生産のオートメーション化がかりに極限に達すれば、それは自然過程の自動性の意識的な抽出・培養に再帰するといえなくはない。極端な言い方をすれば、現在人類が歩んでいる産業化の過程はいわば、完全オートメーションから完全オートメーションに至る長い夢の途中であるというように捉えることも可能なのである。だがマルクスの場合、このように生産手段が生産物にいわば自動的に転化するという発想は根本から否定されている。

1.2 生産と消費

しかし、このように労働と生産とを直接に結びつけ表裏の関係におくことには、理論的にみてどこまで妥当性があるのか、両者の基本的な関係をめぐる問題がここに潜んでいるように思われる。¹³ そもそも、

⁸ Sraffa[6]では、『商品による商品の生産』というタイトルが示すように、その理論の出発点をモノとモノとの反応過程に設定している。この「商品」のうちには「労働力」ははじめ含まれていないのである。だが、このように労働ぬきの生産過程を抽出した理由について、この著書は寡黙を貫いている。

⁹ Marx[10] I, S.195,(1)317頁。なおマルクスは、この「生産的労働」の規定に関して「このような生産的労働の規定は、単純な労働過程の立場から出てくるものであって、資本主義的生産過程についてはけっして十分なものではない。」と注記し、その展開を第1巻第17章「絶対的および相対的剰余価値生産」の冒頭に委ねている。

¹⁰ Marx[10] I, S.535,(3)16頁

¹¹ Marx[10] II, S.241,(4)385頁

¹² Marx[10] I, S.221,(1)359頁

¹³ 宇野弘蔵はこのような『資本論』における「生産物の立場」の意義を強調し、つぎのように「労働過程」に対する「生産過程」という規定を明確に示した。

労働過程において、人間は自己の労働力をもって労働手段を通じて労働対象に、一定の目的にしたがった変化を与え

生産と対をなす概念は消費であるはずである。もし労働過程が生産にとって不可欠の本質的契機であるとすれば、逆に消費においても労働がなされるということは考えにくくなる。しかし、消費にともなう労働の存在は、たとえば「不生産的労働」の規定などをめぐって、従来からさまざまなかたちで議論の対象とされてきた。消費過程においてもなんらかのかたちで労働が関与することを認めるとすれば、少なくとも労働過程の一般規定が判別基準となって、その有無によって生産と消費の概念区分が可能となるというような論理構成はとりえないことになる。いずれにせよ生産と消費との関係は、労働の問題とは切り離しても規定できるより基礎的な概念区分である可能性が高い。とすればまた、労働過程の存在しない生産過程という概念規定にも、論理的には受容の余地が生じる。『資本論』第5章第1節「労働過程」は、たしかに人間労働に対する鋭い洞察を含んではいるが、この過程を結果から捉えかえすかたちでもちだされた生産という概念との間に不明確な点が残されているように思われるのである。

このため、いま引用した「生産物の見地」に関する記述にすぐつづけて、『資本論』では生産と消費の関連があらためて論じられてゆくことになる。

ある一つの使用価値が生産物として労働過程から出てくるとき、それ以前のいくつかの労働過程の生産物である別の使用価値は生産手段としてこの労働過程にはいつて行く。この労働の生産物であるその同じ使用価値が、あの労働の生産手段になる。それだから、生産物は、労働過程の結果であるだけでなく、同時にその条件でもある。¹⁴

ここに示されているのは、事実上マルクスがのちに再生産表式によって明示的な規定を与えてゆく内容である。すなわち、社会的な分業関係を前提とし産業部門間で生産物を受け渡ししながら、過去の生産手段の存在を前提に現在の生産が進められ、それがまた将来の生産条件を準備するという循環構造が示されている。このように現在の生産にとって過去の生産が前提になるという視点は、投入と産出との量的な比較関係を含み、循環の存続可能性は産出の集合が投入の集合を包含できるかどうかにかかわってくる。そして、この量的な差としての余剰の概念が明確になれば、それはまさにフィジokratから古典派におよぶ再生産概念そのものとなる。いずれにせよ、マルクスのここでの説明は、労働過程といっても労働だけで過程が出発可能なわけではなく、生産手段の存在が前提となることが明らかにされ、生産の核心がモノとモノの反応過程にあることが示唆されるかたちになっている。

しかし、マルクスはここで事実上 再生産 という視座を提起しながら、そこから生産と消費との関連

て、自然物を特定の使用価値として獲得するのであるが、労働のかかる生産物はもはや労働過程からは離れた一つの生産物としてあらわれる。自然物と同様の外界の対象物をなすわけである。ただそれは生産せられたる対象物である。そしてこの生産物の見地からすると、労働対象も労働手段も共に生産手段とせられ、労働もまた生産的労働としてあらわれ、労働過程は同時に生産過程となる。(宇野 [?]88 頁)

最後の部分にでてくる「生産過程」という用語法は、『資本論』の該当箇所にはなく、宇野が独自につけ加えたものである。そのねらいは、「生産物の見地」を通じて、生産手段に対象化された労働が労働の合目的なはたらきに媒介され、現在の生産的労働とともに新たな生産物の生産に必要な労働の一部とされる関係を明確にするところにあった。宇野はこの側面を、「A 労働過程」とは分け、B「生産過程における労働の二重性」として、項を別にして論じている。これは、抽象的人間労働の規定を合目的な活動という人間労働の本質にさかのぼって与えようとする重要な試みとして評価しなくてはならない。しかし、それと同時に、労働と生産との関連に関していうと、マルクス以上に両者を同じ過程の表裏の関係として位置づける結果になっている。なお、「生産物の立場」に注目してマルクスおよび宇野の議論を検討した渡辺 [?] も参照されたい。

¹⁴ Marx[10] I, S.196,(1)317-18 頁

を展開しえないままに終わっている。この結果、マルクスはこの後、つぎのように「生産的消費」という考え方に後退してゆくことになる。

労働はその素材的諸要素を、その対象と手段とを消費し、それらを食い尽くすのであり、したがって一種の消費過程である。この生産的消費が個人的消費から区別されるのは、後者は生産物を生きている個人の生活手段として消費し、前者はそれを労働の、すなわち個人の働きつつある労働力の生活手段として消費するということによってである。それゆえ、個人的消費の生産物は消費者自身であるが、生産的消費の結果は消費者とは別な生産物である。¹⁵

ここでは、「労働そのもの」が「素材的諸要素」を用いてなされるという関係が、それらを消費して生産物を生産するというかたちに読みかえられている。もちろんマルクスは、必ずしもこのようなかたちで生産と消費との関連を原理的に明確にしようとしたわけではあるまい。むしろ、両者の区別は所与としたうえで、その生産も一種の消費と見なせないこともないのだと補足しているだけでなのだろう。しかし、この説明は生産と消費の関係を相対化し、事実上両者の区別を曖昧にするだけのものとなっているように思われる。¹⁶ この点は、たとえば「個人的消費」でも労働がなされるのかどうか、問うてみれば明らかになる。「個人的消費の生産物は消費者自身である」という説明を額面どおりに受けとるとすれば、「個人的消費」も一種の生産過程であることになる。ここでもし、労働がなされていないとすれば「個人的消費」の過程は、労働なき生産過程ということになる。逆に「生産的消費」と同様に労働がなされるとすれば、消費過程においては消費者が自分自身を意識的に労働対象として労働するという奇妙な事態を想定しなくてはならないことになるし、労働力の価値規定ではこのような労働の存在を顧慮することなく、生活手段の価値のみに帰着させたこととも齟齬を生じることになる。¹⁷ こうした混乱の根本原因は、労働はかならず何かを生産する という命題にあるといえよう。

1.3 生産の概念

このようにマルクスは、労働過程を結果から振りかえることにより生産という概念をそこにもちこもうとしながら論理的に明確な関連づけに成功しないままに終わっている。生産と消費との区別は、一見自明のこのように思われるが、厳密に規定しようとするとは実はけっこう厄介な問題となる。そこで、ここでは以上の問題点の検討をふまえ、生産という概念に関してはっきりした規定を与えておくことにしたい。

まず直感的にわかるケースとして、小麦の種子の増加を考えてみよう。たとえば、小麦 10 トン が自然に小麦 20 トン に増大したという過程を考えてみよう。この場合、そこに人間の労働が関与したかどうかは別として、それが小麦の生産過程であるという規定は与えられる。なぜなら小麦が少なくとも再生産を継続できる状態にあるからである。この過程で小麦 10 トンは小麦 20 トンになっているが、これが生産で

¹⁵ Marx[10] I, S.198,(1)321-22 頁

¹⁶ マルクスが生産と消費の関係について比較的まとめたかたちで論じているのは、「経済学批判要綱」への序説「Marx[9]」においてである。しかし、ここでは古典派経済学者の見解への批判的解釈が中心となっており、マルクス自身の独自の見解が体系だてて述べられているとはいえない。この箇所にも「生産的消費」に関する説明がある (S.27,36 頁)。

¹⁷ Marx[10] I, S.186,(1)302 頁。労働力に対して生産概念を拡張することの問題点については小幡 [12]3 頁以下を参照せよ。

ある規定できるのは、そこに小麦 10 トンの剰余をともなうからである。かりに小麦 10 トンが小麦 5 トンに減少するような過程であれば、それは粗産出物をもたらしてはいてもマイナスの純生産物をともなっている点で、小麦の消費過程だということになる。これは一般に小麦の消費というのが、小麦 10 トンをすべて消滅させ小麦 0 トンにする過程であるということの外延である。

しかし、このような再生産概念を核とした生産の規定は、投入される産出物が複数になると面倒になる。ある過程が生産であるかどうかは、それだけを独立に取り出して規定できるものではなくなるからである。たとえば、小麦 10 トンと馬 1 頭で小麦 30 トンが産出されるとしよう。この場合、この過程が生産とよべるかどうかは、馬が産出される過程が明示されないかぎりなんともいえない。社会的に相互に生産手段を生産しあいながら、それらの総体が剰余を産みだすかどうかによって生産過程であるかどうかを判明する。生産という概念はこの意味で社会的再生産という観点からはじめて厳密に与えることができるものであり、労働主体の個別的観点からだけでは、十分な規定を与えることができないものだということになる。

しかし、社会的再生産の観点は 生産 の規定を厳密におこなうためには不可欠な条件であるとしても、この観点が与えられれば自動的に生産と消費との区別がでてくるわけではない。そもそも社会的再生産という把握のためには、過程 という概念がその基礎として与えられる必要がある。この場合、複雑に入り乱れて進む現象は、あるまとまった単位の投入と産出の対応関係として操作可能な過程 に分解され、それらの組み合わせとして再構成されることになる。そしてこの場合、最低限必要となるのは、そこに人間主体による逐次的な統御の介入を要するにせよ、投入と産出との間に計量可能な安定的な関係が存在するということである。出発点となる状況とそれに続く状況との間に、たとえ原因と結果として定性的に捉えうる関係がみられても、それだけでは生産という概念を構成するための基礎としては充分ではない。そこには明瞭な量的規定関係が存在しなくてはならないのである。そして、基本的には客観的な自然法則によって支配されるモノとモノとの反応過程のうちには、その複雑さのために人間主体によって完全には認識できないにせよ、ともかくある幅で統御可能な安定的な関係が潜んでいるといえる。生産という概念の定立にとって、投入と産出との間に定量性を具えたいいくつかの過程の抽出が基礎的条件となるのである。以上述べてきたところをまとめておこう。

1. まず確認しておくべきことは、生産過程の基本規定は、モノとモノとの反応過程に関連するものであり、労働過程とはさしあたりは関係なく規定できるという点である。労働がなされているから生産過程であるという保証はなにもなく、生産という概念はあくまでも消費との対比でその規定が与えられるものである。
2. さらに生産という概念は、その外部から投入を取り込む、いわば開かれたかたちの個別過程に関するものではない。それは、基本的にその投入の総体をその内部で自己補填できるような社会的な再生産の系に対するものなのである。この系が全体として、その投入をうわまわる剰余を伴う場合、生産がなされているというのである。

3. モノとモノとの反応過程の束として生産を規定するためには、それを構成する個々の過程がそれぞれの投入と産出との間にある幅で統御可能な安定した量的関係をもっているということが前提となる。

2 労働過程

2.1 自然の統御

さて以上のように、労働と生産とは異なる次元に属するものであるとすると、「労働そのもの」と「生産的労働」との関連はどのようになるのか、つぎにこの問題に検討を進めてゆこう。この関連を明らかにするために、ここではまず、マルクスが生産との関連に論究することなく規定した、「労働そのもの」という概念の内容に検討を加え(2.1,2.2)、つぎにその内部に「生産的労働」が凝結する関係を示す(2.3)ことにする。

「労働過程」における「労働そのもの」を論じた箇所は、つぎのような内容ではじまる。

労働は、まず第1に人間と自然との間の一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材にたいして彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然[天性]を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。¹⁸

ここでは「自然」という概念が重要な意味をもっている。それは、「自分の外の自然」というかたちで人間主体と対置されているようにも読める。しかし、この場合の「自然」は主体と切り離された外界とされているわけではない。同時に「自分自身の自然」が存在し、この内的自然の存在が、外的自然を制御する手がかりを与えるとされている。いわば、外的自然と同じ基本原理を具えた内的自然が存在し、その内的自然たる身体構造がすでに制御-被制御系を内蔵しているために、この身体と外的自然の間にも同型の系が拡張できるわけである。そしてさらにこのことが、さまざまな人間労働の内的諸契機を分解し、外的自然過程へ還元できる基礎をなしているといえよう。すなわち、人間の身体的分肢を機械し、その能力を外部機構に委ね、制御の周辺を外的自然過程に押し出し、自動化することを可能にしているのである。このように考えてくると、労働という行為の核心をなしているのは、内的であれ外的であれ、ともかく自然の制御という基本的関係なのであり、人間と自然との間の物質代謝といっても、そこでは人間と外的自然といった単純な主体と客体の間での物質のやりとりを意味するわけではないことがわかる。人間の神経系や手や脚は主体であるが、労働手段や労働対象は自然に属するということではないし、また労働力を生

¹⁸ Marx[10], S.192,(1)312頁

理学的なエネルギーといった単純な物理的動力の支出として位置づけられているのでもないのである。

このような「労働そのもの」に関する規定は、一見したところ、人間は労働によって自然を制御することでなんでも生産できるかのごとき印象を与えよう。¹⁹ しかし、マルクス自身はこの能力をむしろかなり拘束的なものとして理解していたように思われる。たとえば、「商品に表される労働の二重性」を論じたところでは、自然力の支配を強調してつぎのようにいう。

人間は生産において、ただ自然そのものがやるとおりにやることができるだけである。すなわち、ただ素材の形態を変えることができるだけである。それだけではない。この、形をつける労働そのものにおいても、人間はつねに自然力にささえられている。²⁰

ここでは、人間の労働は自然によってその活動の態様を一方向的に規定されているかのような説明となっており、労働主体による働きかけという契機は消えている。おそらくマルクスの基本的な考えは、統御するという自由はあるが、しかしそれは統御される側にはたらく自然法則を抽出しているにすぎないということなのであろう。その意味で、人間はこのような統御活動としての労働を通じて、モノとモノとの反応過程に一定の計量可能性をつくり出すことになる。このような人間労働はモノとモノとの反応過程にかかわるかぎりでは、それに規定され特定の期間をかけることになしにその過程を通過することはできない。生産過程のもつ技術的確定性は、この意味で自然法則を前提にはするのであるが、しかしそれを主体的に統御するという活動ぬきに人間にとって即時的存在として無条件に現れると考えるべきではないのである。

このように整理してみると、労働する場合にその対象と手段となる自然過程にはたらいっている自然法則を知ることが重要となる。しかし現実の労働過程においては、それは必ずしも完全な知識を要求するものではない。現実が生じるモノとモノとの反応過程は、複雑な要因の連鎖であり、人間主体によって完全に予測どおりになるわけではない。その制御のためには自然的な要因のすべてを認識する必要はなし、またそれは基本的に不可能なことである。労働過程で重要となるのは、過程の方向を決定づけている、調整のポイントとなる節目を的確につかみ、そこで誤差を計測し逐次的な調整を試みることであろう。たとえば、陶器を焼くのであれば、窯の温度をなんらかの方法で知ることがこの過程を制御する節目となるのであり、調整の手段として燃料の量を加減ればよい。一般に人間はけっしてモノとモノとの反応過程の連鎖をすべて知らなくても、経験的にこの節目をおさえて行動することができる。人間の身体活動は、目的となる対象を意識すれば自然に発動するのである。たとえば、鉛筆を握るという場合、握られる鉛筆は意識されてもそれを握る手の動きを意識することはない。そして文字を書くときには、手のなかにある鉛筆ではなく、書かれる文字に視線は集中される。人間はこのようなかたちで、いわば分節化された何層も

¹⁹ たとえば Grundmann[2] も、この労働過程論のマルクスの労働概念に関しては、自然に対する支配という観点が軸をなすと解釈している (pp.99-100)。Immler[3] もこの箇所を引き、マルクスにおける能動的な労働力が受動的な自然力の決定的な分裂がそこに示されているとしている (321 頁) が、Immler の議論は Grundmann が Schmidt[4] の研究などをふまえ、マルクスにおける「自然」概念の独自性に立ち入った検討を試みている (pp.91-98) のに比べて、マルクスを古典派経済学における労働価値説の流れをそのまま継承し、自然の問題を軽視しているというやや一方向的にすぎる評価を下しているように思われる。

²⁰ Marx[10],I, S.57,(1)85 頁

の制御系を外界に向かって張り巡らせているのであり、そうした目的指向的に行動できる道具的な世界のなかではじめて安住できるわけである。しかし、このような無意識のうちに何となくできる世界を分析し、それを分節化された契機からなる構造体に対象化することが、過程全体に対する制御の精度を高め、やがてそれを自然過程に内在する自動化に還元してゆくことを基礎となるのである。鉛筆を握って文字を書く動作を機械装置に実行させようとする、何気なくおこなっている人間の動作の複雑な諸契機の分析の困難に気づくことになる。このような「労働そのもの」を通じて、人間はこのような自然的な過程に埋没する存在をこえているということであろう。

2.2 合目的的な活動

このような自然の統御としての労働は、その目的の存在を抜きには考えられない。このような観点から、マルクスは「労働そのもの」の本質規定をつぎのように展開してゆく。

われわれは、ただ人間だけにそなわるものとしての形態にある労働を想定する。蜘蛛は、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蛹房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと、最悪の建築師でさえも最良の蜜蜂にまざっているというのは、建築師は蜜房を蛹で築く前にすでに頭のなかで築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり観念的には存在していた結果が出てくるのである。労働者は、自然的なものの形態変化をひき起こすだけではない。彼は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである。その目的は、彼が知っているものであり、法則として彼の行動の仕方を規定するものであって、彼は自分の意志をこれに従わせなければならないのである。そして、これに従わせるということは、ただそれだけの孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現れる合目的な意志が労働の継続期間全体にわたって必要である。しかも、それは、労働がそれ自身の内容とその実行の仕方によって労働者を魅することが少なければ少ないほど、したがって労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の自由な営みとして享受することが少なければ少ないほど、ますます必要になるのである。²¹

ここでマルクスは、人間労働の特性を合目的な活動という観点から捉えてようとしているわけがあるが、この場合、その目的はどのようにして形成されるのかという点にはさして関心が払われているわけではない。たしかに多くの場合、労働の目的は設定されていさえすればよいのであり、そこに特段の困難があるとは感じられない。それはふつう与えられているものであり、労働に際してその都度即時的な欲求から形成されるようなものではない。特定の生活様式を前提とすれば、生産物の様態はすでにそれによってあらかじめきまっているといてよい。着衣をとってみてもその基本的な形態は歴史的・文化的に与えられており、衣

²¹ Marx[10],I, S.193,(1)312-13 頁

服の生産においてあらためて着衣の欲望から特定の衣服のスタイルがデザインされるわけではない。その意味で不定形な欲望一般から労働が発するわけではなく、むしろ充足されるべき欲求自身が生活様式によって定型化されているとあってよい。しかし、このことは労働の目的が外部から固定的に与えられており、瞬時におこなわれるものとしてしまうわけにはいかない。人間の労働にとって、多かれ少なかれ主体がその頭のなかに築くという、いわゆる 構想 の過程²² が不可欠なのであり、労働主体の活動をぬきにはじめから固定的なものとして与えられているというわけではない。マルクスがここで人間労働を合目的な活動として規定したことのうちには、目的を自らの「心像のなかに」はっきりしたかたちに形成する作業も当然に含まれているものと考えなくてはならない。この 構想 の過程はたしかに、逐次的な制御の 実行 の過程とは区別されてよいものであり、また両者が異なる主体のもとに分割されることもありうる。しかし、労働の本質を意識的な目的追求の活動として規定する以上、この目的形成の活動を排除することにはならない。労働そのものは、目的形成とその実現のための自然の制御とを含む総和として捉えられる必要があるのである。

このような目的形成の活動は、建築師なら「蜜房を蟻で築く前にすでに頭のなかで築いている」という場合のように、単にある所与のイメージを労働主体が「心像のなかに」描くというだけではない。それは目的が結果として安定して再現するように過程を分析し、労働の遂行の手順をしっかりと組み立てるという設計的な作業も含むものと考えなくてはならない。目的にいたるまでの過程を分析し、過程の統御にとって要所となる契機を割り出しその計測方法を考案したりする作業も、「労働そのもの」の重要な構成要素となるわけである。その意味で、既存の生産方法の改善や新たな生産方法の発見などの活動も、この延長線上に「労働そのもの」の一端を形づくると考えてよい。一般に現実の逐次的な制御の過程は、同時に対象となる自然過程の特性を知る格好の実験の場でもあり、そこでの未知の部分に対する観察の深化が改善や発見の契機となってきたのであるが、それらは独自の研究開発活動として特化することもありうるのである。

さらに、このような目的形成は単純に個々の労働主体の内部で完結するものではない。人間の合目的な活動が、本来自己の直接的な欲求から切り離されて展開されるという特性からして、それは他者の設定した目的の追求も当然に可能とするものであった。とすれば、この他者の目的を正確に引き受けるためのコミュニケーションの活動も「労働そのもの」の重要な契機となる。むしろ、この過程は困難な面もあり、歴史的にふりかえると、モノを介した事後的な了解が幅広く存在することは事実である。労働は不確かな相手の意志を確かめて、それに基づいておこなわれるというだけでなく、およそ社会的に通用しそうな「有用物」をまず量産しておき、後からそれを必要とする相手を探すとにかくで結果的に労働の社会的なつながりを確保してきた領域が広く存在する。しかし、それだけではないこともまた明らかであろう。人間はさまざまなコミュニケーションの手段を発展させながら、相手の欲求している内容をそのできるだけ正確に把握することで、その活動の社会的な効果を高める能力をもっている。こうした、コミュニケーションが充分におこなわれることで、複数の過程からなる最終目的の実現の効率化は進む。そのかぎりです

²² Braverman[1],p51.,55 頁

は、個別の過程の内部の設計活動と同じ意味をいわば複数の過程間の関係に拡張したものと見なすこともできよう。むしろこの場合、主体内部における整合性の追求としての設計活動とは異なる、他者との関係の調整という複雑な問題が加わるが、それらは過程と過程とを調整し、最終的な目的に到達するという人間活動の合目的的活動の拡充の活動という共通する基底をもつわけである。そして、物的な生産過程が自動化するなかでは、むしろこのような他者からの目的を正確に受けとめて、ある過程の結果として設定するような活動が労働の基本的な要素となることも充分考えられる。さらにこのような目的の引き渡しは、それを実現するための手順の伝達にも発展しうる。そうなれば、このコミュニケーション活動は技能の実装などのかたちで、一種の教育的な活動と重なり合うことになるのである。

2.3 生産的労働の析出

このように「労働そのもの」を整理すると、それが「生産的労働」とそのまま合致することにはならない理由がみえてくる。問題は「労働そのもの」が目的実現の手段の体系化や他の目的との整合性をはかるコミュニケーション活動を内包するとすれば、それ全体がその活動の量と成果とを定量的に関連づけることがむずかしという点にある。すでに述べてきたように、元来生産という概念は、少なくともその過程に投入されたモノと産出されたモノとの間で量的な比較を許すことを前提としていた。したがって、モノの生産に投じられた労働という意味で「生産的労働」という概念を用いるかぎり、この種の効果との関連が計測困難な活動は「生産的労働」のうちに含めるわけにはゆかない。もちろん、このことはこれらの活動が労働でないとか、あるいはそれは生産にとって不必要なものだというわけではない。むしろ、このような活動があるからこそ、人間にとって有意義なある安定的な増殖過程が抽出されるわけである。そして、もしこの過程がその精度を高め、自己調整的な性格を強めてゆけば、結果において「生産的労働」は収縮することになる。

それだけではない。また、このような設計やコミュニケーションといったそれ自身、モノとモノとの反応過程の外部に位置する人間の活動も、実は固定的なすがたで与えられているわけではない。設計やコミュニケーションも、単に徒手空拳でなされる行為ではない。それ自身、さまざまな手段を駆使して遂行されることになる。たとえば、建築師の場合もその図面の作成にはそれに必要な用具を用いてはじめて可能となるのであり、また他者とのコミュニケーションも通信技術を利用することでその効率化が図られてきた。たしかに、この種の活動総体をとってみると、立案したり相手の意志を確認したりする核心部分には、定量化しがたい部分が残るのはたしかである。しかし、それらの周辺には定量的な生産過程として分離可能な契機が伏在している。人間の労働過程の進化は、こうした定量化の可能性を潜在的に秘めている領域において生まれるのである。「労働そのもの」は、全体としては量化が困難に思われる構造をとめないながら、しかしその内部にこのような「生産的労働」が開発されてくるフロンティアを有しているといえよう。このフロンティアは、ここ数百年ばかりの間はいわゆる大量生産へ向けて人間の手先の制御活動において加速度的な進歩をみた。その結果が近年における物的生産過程からの人間の手先の活動の駆逐であ

ろう。しかし、それはけっして「生産的労働」の消滅を意味するわけではない。その解体はそのフロンティアを転移させており、これまで人間の知的な固有の活動であると考えられてきた領域において今日新たな労働の分解がはじまろうとしている。²³

このように考えると、「労働そのもの」はその本来の性格からして、全体としてはつねに量化しがたい領域を内包した人間の意識的な活動としてありながら、この計量が難しいこの種の活動の拡充が、その内部に制御の可能な過程を形成し、その過程で必要となる量的な確定性をもった人間労働を析出してゆくという関係になっているのである。人間の合目的活動が、外的であれ内的であれ、自然的過程と結びついている以上、そこには人間が意識的に制御・管理することによってはじめて安定した結果が生じるような半自動の過程が内包されている。そしてこのような過程に沿った労働も、その過程に投下されるモノと同じような定量性を帯び、労働手段と労働対象が生産に投じられた生産手段という規定をうけるとすれば、それと同様にこの種の労働もまた「生産的労働」として現れるわけである。

3 環境・生産・労働

3.1 労働過程の「対象的条件」

ここでは、いままでに説明してきた生産と労働の関係をさらに広角的な視点から捉えかえしてゆくことにしたい。これまで説明してきたように、生産という概念は本来モノとモノとの反応過程に関するものであり、基本的には人間主体もそのなかに位置する自然的過程の増殖的性格を指すものであった。しかし、この自然的な過程は人間主体にとって、それが望ましいとはかぎらない。人間は、他の生物の場合と同様、このような自然的な乱雑な過程のなかで自己の生命を維持するために、環境への適応をはかってゆかなくてはならない。その適応の過程として、人間はその労働を通じ、意識的にこの自然過程を組織だったものに編成し、意図した目的から乖離しないように逐次的に制御することになるのである。

しかし、このような過程は、あくまでもそれを取りまく複雑な自然現象のなかに存在するのであり、人間主体がそれをどう認識するかということこそえた広い意味での自然的な物質代謝のなかで営まれるほかないものである。この点に関して、『資本論』はつぎのような説明を与えている。

もっと広い意味での労働過程がその手段のうちに数えるものとしては、その対象への労働の働きかけを媒介したがってあれこれの仕方での活動の導体として役だつ物のほかに、およそ過程が行われるために必要なすべての対象的条件がある。それらは直接には過程にはいらぬが、それらなしでは過程はまったく進行することができないか、あるいはただ不完全にしか進行することができない。この種類の一般的な労働手段はやはり土地そのものである。なぜならば、土地は、労働者に彼の立つ場所 [locus standi] を与え、また彼の過程に仕事の間 [field of employment] を与えるからである。この種類のすでに労働によって媒介されている労働手段は、

²³ この点に関しては、小幡 [13] をみよ。

たとえば作業用の建物や運河や道路などである。²⁴

ここでいわれている「過程が行われるために必要なすべての対象的条件」というのは、広く労働過程が遂行される自然環境のようなものを考えればいいのであろう。人間の労働過程は、それをとりまく自然環境に対してさまざまな影響を及ぼしながら展開されてきた。たとえば、燃焼という過程は当然大気の状態に影響を与えることになる。しかし、一般には酸素の消費と二酸化炭素の排出を生産を構成する過程として考えるということはおこなわれてこなかった。それは、労働過程をとりまく自然環境における物質代謝のなかで安定的に維持されるものとして放置されてきたのである。むしろ、こうした自然環境に属すると考えられてきたもののなかには、労働過程の「単純な諸契機」をなすものもある。マルクス自身、労働対象に関する説明をまず、「土地」に関連するものから展開している。

人間のために最初から食料や完成生活手段を用意している土地（経済学的には水もそれに含まれる）は、人間の手を加えることなしに、人間労働の一般的な対象として存在する。労働によってただ大地との直接的な結びつきから引き離されるだけの物は、すべて、天然に存在する労働対象である。²⁵

この点は、労働手段に関しても同様である。

土地は彼の本源的な食料倉庫であるが、同様にまた彼の労働手段の本源的な武器庫でもある。それは、たとえば彼が投げたりこすったり圧したり切ったりするのに使う石を供給する。²⁶

このようにマルクスの場合、「土地」に代表される環境が、一部は労働過程の「単純な諸契機」を構成するものとされながら、それをこえてさらに広い「過程が行われるために必要なすべての対象的条件」が存在するという関係が認められているわけである。問題はこの「対象的条件」一般がなぜ「それらは直接には過程にはいない」というかたちで労働対象や労働手段から区別されるのか、という点にある。マルクス自身はこの問題に明確な解答を与えているとはいいがたい。しかし、つぎのような「補助材料」に関する説明は、事実上、労働過程がさまざまな自然的な物質代謝の束であることを示唆する内容になっている。

原料は、ある生産物の主要実体をなすことも、またはただ補助材料としてその形成に加わることもありうる。補助材料は、石炭が蒸気機関によって、油が車軸によって、乾草がひき馬によって消費されるように、労働手段によって消費されるか、または、塩素がまだ漂白されていないリンネルに、石炭が鉄に、染料が羊毛につけ加えらえるように、原料のうちに素材的变化を起こすためにつけ加えられるか、または、たとえば作業場の照明や採暖のために用いられる材料のように、労働の遂行そのものを助ける。主要材料と補助材料との区別は本来の化学工業ではあいまいになる。なぜならば、充用された諸原料のうちで再びその生産物の実体として現れるものはなにもないからである。²⁷

²⁴ Marx[10] I, S.195,(1)316-17 頁

²⁵ Marx[10] I, S.193,(1)313 頁

²⁶ Marx[10] I, S.194,(1)314 頁

²⁷ Marx[10] I, S.196,(1)318-19 頁

ここでは、労働対象や労働手段のみならず、労働環境を調える材料までも含めて現実の労働過程が複雑なモノとモノとの反応過程の束であることが明確にされており、しかも化学工業に代表される複雑な生産過程では、どこ過程が主たるものなのかという区別さえ不分明になることが示されている。このような観点を延長すれば、労働過程において生産として切り出される特定のモノとモノとの反応過程の組成はけっきょく、それを制御しようとする人間の意図を離れては存在してしえないものであることがわかっていく。 「染料が羊毛につけ加えらえる」というモノとモノとの反応過程にとって、「作業場の照明や採暖」は同じ次元で反応するわけではない。ただ、染色工程を制御する労働主体の意識において、有機的な結合を獲得するのであり、後者の材料に「補助材料」としての位置が与えられるわけである。マルクスの場合も、この点がもっと明確にされるべきであったように思われる。それによって、労働過程も実は自然環境の内部で繰り広げられる物質代謝の一部を構成し、それを特定の目的関心で制御する労働主体が、どの部分に着目するのかという多分に裁量の余地をかかえたものである点が明確になる。むしろ、このことはモノとモノとの反応過程がそれ自身として主観的なものだというわけではない。個々の過程は、それを「対象的条件」とするか、労働過程の「単純な諸契機」に含めるかどうかには関わりなく、基本的に自然的法則に基づいているのである。しかし、両者の割振りには主体の介入をまたねばならないのであり、その決定には歴史的な要因やさらに社会的な価値判断の形成が深くかかわり、広い意味での経済文化の形成を不可避とするわけである。

3.2 消費と労働

さて、このように生産過程を構成する個々の過程は、労働主体の関心を離れては存在しないという点をふまえて、再度生産と消費の循環のなかにおける労働過程の位置を捉えかえしてみることにしよう。ここでは問題点を明確にするために、単純化した例で説明してゆくことにする。いま、社会的な生産物を小麦によって代表させることにする。そして、小麦 10 トンに「生産的労働」10 時間を投じて、20 トンの小麦が収穫されるものとする。しかし、この生産された小麦を消費するために、さらに 5 時間の定量的な労働が必要となるものとし、この関係をつぎのように示すことにする。

小麦 10 トン + 労働 10 時間 → 小麦 20 トン

小麦 10 トン + 労働 5 時間 → 小麦 0 トン

この過程は、まとめてみれば

小麦 20 トン + 労働 15 時間 → 小麦 20 トン

となる。すなわち、20 トンの小麦の生産と消費のために合計 15 時間の労働がなされたということになる。しかし、これを小麦の生産と消費という二つの過程に分解してみると、小麦の生産には 1 トンあたり 1 時間の「生産的労働」が投下され、これに対して、小麦の消費には 1 トンあたり -0.5 時間の「生産的労働」

すなわち 0.5 時間の消費的な労働がなされたということになる。小麦の量を増やす労働がプラスの記号をとるなら、その量をへらす労働はマイナスの記号をもつのが当然であろう。しかし、このように生産と消費とを等位におき、さまざまな生産物が生産され消費される過程を一つながりの切れ目のない過程として扱うことには与しえない。理由は二つある。

[1] このような捉え方は、すでにみてきた「労働そのもの」と「生産的労働」との間に潜む溝をないがしろにすることにつながる。たしかに、生産と消費との間に技術的な隔壁が存在するわけではない。一般に消費であると思われる過程でも、そこで目的意識的な人間活動が展開されるかぎり、技術的な合理性が追求されることはたしかである。小麦の生産がすなわち全過程における生産の終着点を意味するものではないことも明らかである。小麦を製粉し、それをパンにするといったそれに続く加工系列はそれぞれ生産過程として捉えることは充分可能なのである。この場合、小麦の生産におけるモノとモノとの反応過程の逐次的な制御としての「生産的労働」が定量性をもつとすれば、それと同じことがこれに続く過程でもある範囲で観察されて当然であろう。²⁸

だが、問題は小麦の生産と消費をめぐって展開される人間の活動をすべて生産的労働の次元に還元しうることかという点にある。すでにみてきたように、「生産的労働」は「労働そのもの」のうちに、それと有機的な関連をもって形成される部分にすぎない。人間の社会性を帯びた労働過程においては、この両者の分離が進行してゆくことは事実である。そして、これまでの歴史を長期的に振り返ってみても、生産諸力の上昇と考えられてきた過程は多かれ少なかれこの分化と関連しているといつてよいであろう。しかし、人間の労働過程のすべてが産業化し、個体化した砂粒のような人間がさまざまな有用効果をいわば点滴のごとくうけるような状況を究極の社会像として受け入れることはできないであろう。もともと、人間の労働過程のうちには、自己の労働を通じてはじめて自己の欲求を充足するという局面が含まれているのであり、この種の積極的な活動ぬきに最後まで受動的なかたちで欲望が満たされると考えるわけにはゆかない。²⁹ 小麦の生産から消費いたる一連の過程をすべてこの種の定量性をもつ手段としての労働に還元して捉えることは、「労働そのもの」のもつ人間主体にとっての積極的な意義を看過させることになるのである。

このことは、あくまでも理論的問題としていえることであるが、こうした論点をふまえておくことは、たとえば、家庭内でおこなわれるさまざまな生産的活動、いわゆる「家事労働」などについて考えるうえで、あながち意味がないわけではない。³⁰ 現代の産業社会において評価される労働は、さきの例でいえば小麦の生産に従事するような特定の範囲の「生産的労働」にかぎられ、消費にかかわる労働はその裏に

²⁸ これが市場経済のもとで、どの範囲で商品として売買され、またその価値を市場で評価されるかという問題はまたこれとは一段抽象レベルの異なる問題となる。この点については、とりあえず青才を参照されたい。

²⁹ マルクスはその研究の当初から、人間労働のもつこの欲求の充足という側面を古典派経済学が無視しつづけている点を批判してきた。この側面については、Grundmann[2], pp.239-241 を参照のこと。Marx[8] では、人間が本来自然のなかにあつて、欠乏感を抱いた「受動的な存在」(S., 208 頁)であるとされ、この欠乏感の充足として人間の労働を広く捉えており、このような視点は、Marx[10] においても、つぎのようなスミスに対する批判に託されている。

彼は、商品の価値に表されるかぎりでは労働はただ労働力の支出として認められるだけだということを予感してはいらるが、この支出を再びただ休息や自由や幸福の犠牲と考えているだけで、正常な生命活動だとは考えていない。(I, S.61,(1)92 頁)

³⁰ 最近では家事労働の問題は、生命活動の再生産というより広い観点から議論されているようであるが、その出発点となった論稿は Kuhn[?] に収められている。

隠されることになる。しかし、このことは「家事労働」もすべて「生産的労働」というかたちで同等に評価されるべきだということになるかといえば、必ずしもそうはならない。とりわけ、人間主体の欲求の充足に直結した「生産的労働」には、自由な構想やコミュニケーションなど、「労働そのもの」がもつ特性が分かちがたく付帯する。今日、産業化の進展した社会では、育児や教育、身障者や老人の介護、あるいは医療など、これまで家族関係に依存してきた労働が社会化され、そこに「生産的労働」の領域が拡充されてきていることはたしかである。しかし、そのことはただちにすべての人間労働が単一の尺度で評価されるべきであるということの意味するわけではない。「労働そのもの」の内部に、「生産的労働」が生みださてくる成長帯が常に存在するのはたしかだが、その後背にはいまだこのような定量化になじまない領域が控えている。それらはやがては分解され「生産的労働」のうちに組み込まれてゆく契機を含んではいるが、技術的に未分解な対象全体を形式的な基準で一律に評価すべきではない。消費にかかわる労働の評価は、歴史的に形成される社会的な価値判断の領域に属するが、理論的な分析はそれらを特定の価値判断を相対化するという役割は最低限果たしうるのである。

[2] 生産と消費とを連続的な過程として捉えることができないもう一つの理由は、[1] の論点と密接に関連している。それは、このような把握が、社会的再生産が一定の 剰余 をともなうという視座を事実上放棄するものにほかならないことになるという点にある。さきの説例にもどっていえば、小麦の生産と消費の関係は、小麦という生産手段を最終生産物としてとってみることにより、社会的再生産関係のうちに、10トンの小麦という剰余物という認識がはじめて成立する。すでに述べたように、生産という概念は、社会的な再生産という観点をぬきに厳密には規定できないものであった。そこには、ある生産手段を確保すれば、それをこえる純生産物が繰り返し生成可能であるということが含意されていた。この社会的再生産過程が、労働過程としてどのように意図的に設計され制御されていようとも、人間の社会は生物社会の一種として自然的な物質代謝を基礎とした 剰余 の消費として営まれるほかない。小麦の生産から消費にいたる過程を連続した一過程としてしまうことは、このような 剰余 の観点を消し去ることにつながる。さきに述べたように、労働過程のうちには自然的な法則に規定された定量的な性格をもつ「生産的労働」が分岐してくるのであるが、「労働そのもの」はこれに還元することのできない広がりをもっていた。そうした「労働そのもの」こそ、ある意味では本源的な人間の欲求充足の積極的な契機として拡充されるべきものなのであるが、そのような非定量的な活動はけっきょく「生産的労働」を核とする社会的再生産過程がはきだす 剰余 を基礎に展開される関係にある。このような 剰余 は、文字どおり余分なものとして存在するのであり、それは結果的には無駄になってもよいものであった。だが、こうした無駄を許すような関係が内包されていないかぎり、人間社会の自由な発展の余地はない。むしろ、それは意図的に無駄を生みだすことをねらって形成されるということではないが、事前に管理できない人間社会の営為に伴ってさまざまな活動や、また本来未知の領域に投じてゆく創造的な活動、あるいは個体の発育・衰滅といった生命や教育にかかわる活動などは、その点でも「生産的労働」と明確に区別されるべき面をもつ。それらも一種の労働であるということと同じ過程のうちに括るわけにはゆかないのである。

3.3 環境破壊と負の労働量

このように、負の労働量という概念は消費活動に安易に一般化すべきではないが、しかし、それにはまったく意味がないわけではない。たとえば、今日深刻化しつつある生産規模の膨張と自然的な物質代謝との関連を捉えるうえでこの概念は一定の示唆を含んでいる。さきの設例にもどって考えてみよう。実際の生産過程においては、労働主体の関心は主たる目的と手段の関係にしばられることになるが、現実のモノとモノとの反応過程はこのような主体の経済的な関心をこえた広がりをもって進んでゆく。小麦の生産も、環境との複雑な物質代謝によって支えられているわけである。このような労働主体の関心をこえる物質循環を、たとえば麦わらに代表させてみることにしよう。いま、10トンの小麦が生育して20トンの小麦の種子に増大する過程で、同時に20トンの麦わらを生みだすものとしよう。この麦わらは自然的な過程に放置しておけばよいという状況下においては、二酸化炭素の吸収や酸素の排出が問題とならないのと同じように、その存在はとくに労働過程には反映してこない。しかし、いまこの麦わら20トンの存在が人間による自然の制御にとって障害となり、労働を通じて除去されなくてはならず、そのために5時間の「生産的労働」が必要になったとしよう。この場合、小麦の生産過程はつぎのように拡大されることになる。

小麦 10 トン + 労働 10 時間 → 小麦 20 トン + 麦わら 20 トン

麦わら 20 トン + 労働 5 時間 → 麦わら 0 トン

ここでは麦わら 20 トンを消費するのに5時間の「生産的労働」がさらに必要となる。言い換えると、麦わら 20 トンを生産するには、-5時間という負の値をもった「生産的労働」が必要となるわけである。したがって、小麦だけを20トン生産するのに必要な「生産的労働」は、10時間ではなく、麦わらの除去に必要な5時間を加えた15時間となるわけである。労働生産物には、直接間接にその生産過程でおこなわれた労働量が含まれているとする、いわゆる「対象化された労働量」³¹の概念を用いるならば、麦わらには「負の労働量」が対象化されていることになる。産出物が複数存在するいわゆる「結合生産」の場合、このように負の労働量が対象化された生産物が存在することになる。³²

このような生産のいわば副産物として現れる廃棄物の処理にかかわる労働は、形式的には小麦の消費における労働と等位にある。しかし、その労働の内容は、明らかに小麦の生産過程における「生産的労働」と同種のものとみるべきである。実際、現実の生産過程の内部には、さまざまなかたちでこのような廃棄物の処理が含まれていると考えてよい。特定の生産過程は、その円滑な進行を補償するさまざまな補助的プロセスに支えられているのであり、その内部を分析してゆけば、多かれ少なかれこの種の消費、すなわち廃棄物処理が内包されていると考えられる。ただそれは、ここでの麦わらのように外部に押しだされ、独自の過程として分離されていないだけである。そして、このような過程に内包された負の「生産的労働」も当

³¹ Marx[10] S.210,(1)341 頁

³² Steedman[7] は、このような負の労働量が存在するケースでは、剰余価値がマイナスの値をとりながら、利潤率がプラスの値を示すことがあるとして、利潤の根拠を剰余価値に求めるマルクスの価値論を否定する論拠とした(chap.11)。しかし、これは労働者がいわば産業廃棄物を賃金で購入して消費するような状況を指している。Steedmanのマルクス批判に対しては、置塩 [14] 175 頁以下に明快な批判がある。

然過程の進行に必要な労働として目的の生産物の生産のために投じられた「生産的労働」の一部に加算されていると考えられる。このように考えると、ここでもやはりどの範囲を生産過程として括り出すかという裁量の幅が存在しているわけである。

市場における利得追求を主要な梃子として進んできた過去数百年にわたる産業化の流れは、社会的再生産の拡大にともなうさまざまな自然的な物質循環への影響を無視しえないものとしてきた。そのなかで、環境を修復するという方向で必要となる 負の労働量 を回避することによって、見かけ上の生産力の上昇、すなわち目的物の生産に要する「生産的労働」の減少として現れているケースがたしかに存在した。ある意味で人間にとって意味をもつ特定の生産活動の生産性は、それを許容してきた環境の生産性に依存しているともいえるのであり、労働の生産性を高めるといことは、それだけ負の労働を環境の側に強いっていることによっているのである。

このように考えると、当然つぎのような立場が浮かびあがってこよう。すなわち、環境の破壊の修復にともなう 負の労働量 の存在を認め、それを勘案したうえで労働の生産性を再評価すべきであるという考え方である。したがって、さきの設例でいえば、小麦の生産に必要な「生産的労働」は、麦わらに代表される廃棄物の除去のための労働も含めた 15 時間 として規定されるべきであり、このように拡張された「生産的労働」の大きさが他の小麦の生産方法との対比においてもつねに念頭におかれるべきだということになる。かりに小麦の生産に必要な労働時間が 7 時間 に減少するようにみえても、その結果生じる廃棄物の処理にかかる労働時間が 10 時間 に増大する場合、たとえば

小麦 10 トン + 労働 7 時間 → 小麦 20 トン + 麦わら 40 トン

麦わら 40 トン + 労働 10 時間 → 麦わら 0 トン

となる場合には、この後者の生産方法はさきの生産方法よりも劣るということになる。現実に麦わら廃棄物の労働がおこなわれれば、前者の生産方法のほうが少ない労働量で小麦の生産をつづけることができることは明らかである。麦わらの処理を自然環境の悪化という代償のもとで続行する場合にも、このような 負の労働量 を勘案した生産方法の再評価がなされるべきなのではないか、こうした主張は充分予想されるところである。

しかし、このような立場には人間の生産活動が自然環境に与える影響全体を基本的に管理可能なものと見なしている点で、根本的な欠陥が潜んでいる。実際、このような廃棄物の作業自体が外的自然に対して影響を及ぼさないという保証はなにもない。たとえば、麦わらの燃焼は大気の汚染という悪影響をもたらす。「労働そのもの」によって制御可能な生産過程は、けっきょく人間の関心によって切りとられた自然的物質代謝の局所でしかない。負の労働量 として浮かびあがってくるのは、全体としては人間によって認知できない未知の自然的循環のなかで、人間の関心と認識能力に基づいて、労働過程の外周に浮上する、いわば外に開かれた部分的な事象であることを知ることこそ重要なのである。人間はこの外部に広がる事象を完全に掌握し制御できるわけではないという、ある意味では「無知の知」に匹敵するような相対化の視点

をここでも確保することから出発するべきなのであろう。社会的再生産の進行にとってこのような廃棄物の処理が必要になれば、その範囲で人間がその消費すなわち処理に必要な労働も、純生産物の生産に必要な労働量の一部として従来から繰り込まれてきた。しかしそれは、やや極端に言えば、人間にとって都合なよう、自然過程の一部を管理可能な領域に改編することにすぎない。このように、廃棄物の処理をある範囲で管理するとしても、社会的再生産の領域を外部に向かって拡張してゆくことは当然複雑な自然的過程を変化させることになる。その意味では、外的自然はすべて修復可能な現状のまま維持しながら、そのもとの純生産物だけが残余として取得できるという再生産の理論像は、大局的な見地からすれば人間がその関心に基づいて構築した特殊な認識枠にすぎないのである。

こうした視点からあらためてこれまでの考察を振り返ってみるとき、むしろ人間社会が歩んできた社会的再生産の拡張の定向性を見直してゆく必要性がみえてこよう。そもそも、人間は労働を通じてモノとモノとの反応過程を自由に管理する能力を他の生物に比べて格段に高めてきたが、そうした「労働そのもの」は単に生産のための手段であるだけではなく、欲求の充足過程でもあった。これまでの産業化の流れのなかでは、このうち「生産的労働」のほうが一方向的に肥大化されてきたのであるが、欲求と労働の目的設定との間の回路に反省を加えることが今日では重要な意味をもつ。「生産的労働」はあくまでも人間の生命活動である「労働そのもの」のなかの一局面にすぎないのであり、人間の欲求が適切に充足できれば、その手段としてのモノとモノとの反応過程の管理の領域を無限に拡張させる必要はない。ここ数百年の間に加速してきた人間の社会的再生産の定向的な拡張をどう評価するかは、これもまた価値判断の領域に属し一種の経済倫理の問題になるが、人間の「労働そのもの」の基本的な役割とそこにおける「生産的労働」の位置に理論的反省を加えてくると、少なくともこのような傾向だけが人間社会の発展の唯一の道ではないことがわかる。社会科学としての経済学に基づく生産と労働の原理的な分析は、この点においても特定の価値判断を相対化する批判的役割をはたすことができるのではないかと考える。

参考文献

- [1] Braverman, *Labor and Monopoly Capital*, 1972, 富沢賢治訳、『労働と独占資本』岩波書店、1974年、
- [2] Grundmann, *Reiner Marxism and Ecology*, 1991
- [3] Immuler, Hans, *Natur in der Ökonomischen Theorie*, 1985, 栗山純訳、『経済学は自然をどうとらえてきた』農山漁村文化協会、1993年
- [4] Schmidt, Alfred, *The Concept of Nature in Marx*, 1971, 訳、『マルクスの自然概念』法政大学出版局、19年
- [5] Smith, Adam *Courses of Wealth of Nations*, 1844, 大河内一男訳、『諸国民の富』中公文庫、19xx年、

- [6] Sraffa, Piero *Production of Commodities by means of Commodities*, 1960, 菱山泉ほか訳、『商品による商品の生産』有斐閣、1962年、
- [7] Steedman, Ian, *Marx After Sraffa*, 197,
- [8] マルクス、田中吉六訳、『経済学哲学草稿』岩波文庫、19xx年、Marx, Karl, *Ökonomische Philosophische Manuscript*, 1844, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, Band xx
- [9] マルクス、資本論草稿集翻訳委員訳、資本論草稿集 1,2 『経済学批判要綱(1861 - 1863 草稿) 1』大月書店、1978年、Marx, Karl, *Manuscript der Das Kapital in 1861-63*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, Band xx
- [10] Marx, Karl, *Das Kapital, I,II,III*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, Band 23-25, 岡崎次郎訳 『資本論』(1)-(9)大月書店、1970年、
- [11] Ricardo, David, *Principle of Political Economy and Taxation*, 羽鳥卓也・吉沢芳樹訳 『経済学および課税の原理』岩波文庫、1987年
- [12] 小幡道昭「労働市場の変成と労働力の価値」『経済学論集』(東京大学)、1991年
- [13] 小幡道昭「コンピュータと労働」『経済学論集』(東京大学)、1992年
- [14] 置塩信雄『マルクス経済学 I』筑摩書房、19年